

Community Welfare Total Care Promotion Project

トータルケアNEWS

25 2007.11.30

発行 社会福祉法人 秋田県社会福祉協議会
〒010-0922 秋田市旭北栄町 1-5
TEL 018-864-2711 FAX 018-864-2701
URL <http://www.akitakenshakyō.or.jp/>
E-mail chiiki@akitakenshakyō.or.jp

CONTENTS

【特集】
地域福祉トータルケア推進
セミナー in 美郷

実践発表・・・・・・・・・・ 2～ 3
実践フォーラム・・・・・・・・ 4～15
シンポジウム・・・・・・・・ 15～23
体験プログラム・・・・・・・・ 24～28

【特集】

住民参加による福祉でまちづくりを目指して！

～ 美郷町で地域福祉トータルケア推進セミナー開催～

去る10月23日(火)、24日(水)の2日間、地域福祉トータルケア推進事業(以下、「トータルケア」という)モデル社協である美郷町を会場に、秋田県社会福祉協議会、美郷町社会福祉協議会、美郷町の共催による「地域福祉トータルケア推進セミナー」が開催された。

セミナーには県内外から、社会福祉協議会役職員、施設職員、民生児童委員など福祉関係者約250名が参加、美郷町社協への指導をしていただいている日本地域福祉研究所事務局長の小野敏明氏(田園調布学園大学教授)や菱沼幹男氏(文京学院大学助教)からも参加いただき、住民参加による福祉でまちづくりの展開方策について実践フォーラムやシンポジウムなどを行った。

今回のトータルケアNEWSでは、美郷町で開催された地域福祉トータルケア推進セミナーの様相について紹介する。



美郷町 松田知己町長のあいさつ

平成 19 年 10 月 23 日（火） 午後 0:45～1:15

《実践発表》「地域福祉トータルケア推進事業の取り組み」

美郷町社会福祉協議会事務局次長 大阪孝次氏

美郷町社協では、合併後の美郷町を第 2 階層、合併前の旧町村を第 3 階層としそれぞれにサポート運営委員会という委員会を設置している。委員の構成メンバーは、福祉関係者だけではなく、自営業者や公募委員など多様なメンバーで構成されている。

第 3 階層のサポート運営委員会は、さらに課題別に作業委員会を組織し、課題解決に向けた具体的な方策について検討をしている。

美郷町では、旧仙南村の第 3 階層サポート運営委員会（愛称：雁の里ふれあい運営委員会）がトータルケアのモデル指定 1 年目の平成 17 年度に組織化され、平成 18 年度には旧六郷町（清水の里ふれあい運営委員会）、平成 19 年度には旧千畑町（ラベンダーの里ふれあい運営委員会）という順番で委員会が設置されてきている。

したがって、仙南地区では今年で 3 年目を迎え、課題別作業委員会も具体的な活動を展開するまでになっている。

美郷町では、トータルケアのモデル指定を受け、まず地域の課題は何かを把握することにした。

この地域課題を把握するための手段として、「専門職アンケート」を行った。「専門職アンケート」は、行政の福祉担当、在宅介護支援センター、ケアマネ、デイサービスセンター、ショートステイ、障害者施設、保育所、幼稚園、民生児童委員、美郷町社協職員に対して、「最近、地域で気になる相談や増えている傾向の相談がありますか」「公的サービスで対応できなく困っているケースがありましたらご記入ください」などの項目で調査を行った。

その結果、「地域で近所付き合いが希薄になっている」「買い物や通院等の交通手段に困っている」「子どもが少なく友達と遊ぶことが少ない」「家族の中で高齢者の居場所がない」などの課題が明らかになった。

また、仙南中学校の生徒に対して一人暮らし高齢者の孤独を解消するプログラムは何かというテーマでワークショップを行い、中学生からは「一人暮らし高齢者宅で花を育てながらその花を売って一緒に会食する」というアイデアが出された。

さらに、地域住民の声を聞く場として地域福祉座談会を町内 40 会場で実施し「あなたが気になる地域の課題は何ですか」などのアンケート調査を行い、地域課題把握に努めた。

このような地域の課題把握を行ったうえで、地域の課題は地域の方々に解決方策

を考えてもらうという観点から、第3階層サポート運営委員会で地域課題の解決方策について検討してもらうことにした。

その結果、仙南地区サポート運営委員会では、「移送サービス」「男性参加収益事業」「空き店舗活用」「動くコンビニ」「花いっぱい活用」の5つの作業委員会が結成された。同様に、六郷地区ふれあい運営委員会では「世代間交流」「除排雪」「空き店舗活用」、千畑地区ふれあい運営委員会では「おたすけマン」「生きがい男性地域貢献」という作業委員会が結成された。

つぎに、仙南地区サポート運営委員会（雁の里ふれあい運営委員会）の取り組みについて具体的に紹介したい。

雁の里ふれあい運営委員会は、「移送サービス」「男性参加収益事業」「空き店舗活用」「動くコンビニ」「花いっぱい活用」の5つの作業委員会が組織化され、委員会ごとに開催日時と場所を決め、会を開きながら具体的な解決方策について検討を行った。

「移送サービス」については、クリアすべき課題が大きく、作業委員会もストップしている状況であるが、その他の作業委員会は月1~2回委員会を開きながら具体的な活動を展開するに至った。

「男性参加収益事業」については、はと麦を栽培し、収穫したはと麦を使ってイベント等でドン菓子をつくり、活動の輪と住民との交流の輪を広げている。

「花いっぱい活用」は、今年開催された国体をきっかけに、「国体選手を花で歓迎しよう」という呼びかけで、町民からプランターなどが寄贈されるなど、活動の広がりが見られた。

トータルケアと地域福祉活動計画との関連であるが、第2階層のサポート運営委員会のメンバーが活動計画策定委員として計画策定に携わったほか、社協職員がプロジェクトチームを編成し現状の事業の分析を行いながら計画策定にあたった。

最後に、トータルケアの推進を通して、社会福祉法第4条の「地域福祉の推進」を念頭に置いた事業推進を心がけるとともに、サポート運営委員会に多様な住民が参加していることから町内における住民活動の協働やネットワークの構築を進めていく必要性を感じているとともに、地域における福祉力の再構築や社協職員の意識改革にもつながったという報告があった。

平成 19 年 10 月 23 日（火） 午後 1:25～3:35

実践フォーラム 「住民参加による福祉でまちづくり」

コーディネーター：文京学院大学助教 菱沼 幹男氏

トータルケアを少し整理しておきたいと思いますが、トータルケアにはいくつかの意味合いがあります。

1 つには保健・医療・福祉の連携という意味合いのトータルがあります。また、地域福祉を進めていくとき、高齢者とか障害者、または児童だけということではなくて、いろんな方々が地域で生活しております。そういう対象別に分けなくてトータルに見ていこうという面もあるかと思えます。

もう 1 つの側面としては、行政と住民が一緒になってすすめていくという意味合いもありますし、住民の方々がどうつながってトータルに活動していくのかという面もあるかと思えます。

ですからこのトータルケアにはいろんな意味合いが含まれているのですが、今日は住民の方々がどのように結びついて活動を展開しているのかというところに焦点を当てていきたいと思っています。

この実践フォーラムのテーマは「住民参加による、福祉でまちづくり」ということです。従来は「福祉のまちづくり」という言葉が使われていましたけれども、「福祉でまちづくり」なんです。

どういうことかということ、福祉だけを整えていくのではなくて、福祉活動を活発にしていくことによって、またそこに住民の方々が関わることによって、町全体を活性化していこうという意味合いが込められているわけです。

まさに美郷町の実践は、住民の方々がいろんな活動に参加することによって地域が変わりつつある、非常に元気がでてきている、そういう実践を今日はご紹介していただけたと思っています。

美郷町雁の里ふれあい運営委員会空き店舗作業班長 高橋美由紀 氏

ふれあいサロン「よってって」は、先程から説明されている地域福祉トータルケア推進事業の一環として開設されたものです。

美郷町は 3 世帯家族が 50%を超えているにもかかわらず、他の市町村の勤務している方が多く、また、子どもは 0 歳から保育園に入れますので日中は高齢者しかいない地域がたくさんあります。核家族の場合は、特に町の学童保育は小学 3 年生までなのですが、4 年生以上でもちょっと心配だなーという声もあります。

それでも何かしたいとか、私はこんなことをしているよという方も多いようで、

同じアンケートで、「あなたが、または地域でできることは」という質問に対して、たくさんの意見が出されました。私が関わった「よってって」についてはこのあと詳しく説明しますので、その前に雁の里ふれあい運営委員会について簡単にお話ししたいと思います。

いまのアンケート結果を受けて、課題を解決するためにつくられた委員会で、委員は全部で30人です。

この委員会の特徴の一つが美郷方式とよばれる、委員を専門職でなく一般から公募したというものです。

そのため委員の職業や年齢は様々なので、自分一人ではまずこんなことは考えないだろうなというようなことをいろんな角度から見ることができ、話し合うことができ、そして結果として充実したものになっていったのではないかと考えています。

この運営委員会では3、4カ月の間課題に対して何ができるかということ話し合ってから5つの活動に絞り、作業委員会というものに移っていきました。

私からは3班の「空き店舗活用」のお話をします。

JA秋田おばこさんが快く空き店舗を貸してくださったお陰で、今年の6月ごろから活発になりました。それまで月に1回集まっていたのが週に1回~2回ぐらいになっていきまして、社協の担当の方がよく「ごめんなー」と声を掛けてくださったんですけども、私たちはだんだん形になっていくのがすごく楽しくて、ぜんぜん苦になりませんでした。

改装で一番こだわったのがトイレです。お借りした当初は男女一緒のトイレ1つだけで隣は物置でした。でもやっぱり小さい子どもさんから、若い方にも来ていただきたいというのでこの物置を片付けさせていただいて、男子トイレ・女子トイレに分けて、そして車椅子でも入れるようにとこだわって、無料でやってくださってる水道屋さんに無理を言いましてかなり頑張らせていただきました。

改装の出来上がりを待ちながら私たちはオープンセレモニーやオープンイベントの内容を話し合っていていきまして、いよいよ去年9月2日にオープンすることができました。

それから2、3カ月のイベントとして1人百円の芋の子汁や豚汁などをふるまったり、健康づくりでいろいろな体操や踊りなどをしました。毎週何曜日



実践フォーラムの様子

と決めて集まるサークルやクラブ活動も増えていったのもこのころです。

小学生も帰宅後宿題を持って集まって、一緒に、あそびながらかもしれないですけど宿題をやったりという場面も見られたようでした。

課題としては、子ども会で利用したいとか、または平日仕事をしているから土日も是非利用できるようにしてもらいたい。あとは年代や、季節に合わせたイベントの開催もあっていいんじゃないかなという声もあります。

でも、何ととっても長時間無人になる場合の問題点が一番重要だと思っています。無人だから何をしてもいいだろうと、悪いことの拠点になってしまっは大変ですので、できれば管理人さんがいて、いろいろな活動の拠点になってくれればと思って話し合っているところです。

1番最初の画面といまの画面の絵が、ちょっと違うんですけども、これは子どもたちの大好きな絵本「たまご兄ちゃん」です。

一番最初のページのように殻に入っているときにはお母さんに守ってもらえるし、みんなはやさしくしてくれるので、ずーっと出たくないんです。

いまの「よってって」も、社協というお母さんに守られて、「社協さんにはお世話になってるしなー」という方々に協力してもらって成り立っています。いざ殻が割れた状態になったときに、自分たちでも活動が続けていけるように、これからの地域の皆さんや社協の皆さんと協力しながらももっとも自分たちのものだ、身近なものだということを感じてもらえるように頑張っていきたいなと思っています。

この殻から出たたまごに兄ちゃんは水溜まりに映った自分に、「うん、きみ、なかなかいいよ」と言うんですね。私たちも自分の姿を映したときに、活動を映したときに、そう言えるように、これからも活動を続けていきたいと思っています。

美郷町雁の里ふれあい運営委員会動くコンビニ作業班長 大釜とよ子氏

福祉の専門職の方々計162名に「最近になる相談は何ですか」等のアンケートを行なったわけですが、委員会のメンバーが調査結果で気になったことは、高齢者のみの世帯が増えていること、また、買物のときに交通手段が無く、できれば自分の目で見て買物がしたいねということでした。

また、一人暮らし高齢者の方を対象にして実態調査を実施しております。社協からご協力いただいてアンケート依頼数は380名、美郷町内の一人暮らし高齢者の方全員を対象に行い、回答者は259名の方でした。

その中で気になったのは、配偶者の方の死別後一人暮らしになったという方が多いということでした。その方々が出かける場所はどこかといいますとスーパーマー

ケットです。そこに買物に行くという方が多かったです。

外出手段は自転車か徒歩です。この自転車か徒歩という方は50%以上を占め、近くでなければ買物ができないという方です。それから冬期間の買物が大変であるという意見が多かったです。

以上の結果をもとにして小委員会の班編成で、「動くコンビニ」として活動を開始することになりました。

活動の実施に向けてどんな方法でやっていくのか、その中の課題は何か、人や場所や方法、社会資源、関係機関との連携をどうするのか、この地域にどういうものがあるかということ具体的、いろいろな情報を拾い集めてやっております。

その結果、移動販売業者の方に協力してもらうのが一番いいだろうということになり、高齢者の方にアンケートを取ることにいたしました。

このアンケートは一人暮らし世帯111世帯と高齢者世帯105世帯の計216世帯に行ない、212世帯から回収しました。

まず一人で買物に行くという方は76%おりました。

自転車や徒歩では買物に行けない、私は買物できない、という答えが返ってきた人が24%でした。

その中で「動くコンビニ」という言葉はお年寄りにはなじまないので「動く買物車」に書き換えまして、“そういうのがあったら利用なさいますか”ということ聞いて、「利用したい」と答えてくれた方が6名でした。

実際に何を買いたいかということも聞いておりますが、肉とか魚とか野菜などが一番多かったです。あとは日用品、衣料品と続いています。

どこに来てもらいたいかということですが、自宅前という方が多かったです。なぜかということで、“買物が負担になっている理由は何ですか”ということも聞いてます。体の具合が悪くて動くのが大変、長距離移動や立っているのがつらいので、できるだけ家の前に来てもらいたいという回答でした。

いまの現状として高齢化がすすんで一人暮らしや高齢者のみの世帯が増えていることなどを踏まえて利用者の方の生活を支えるために、委員全員一致で一人でも利用したいという方がいれば事業を展開したいという結論に達しました。

そこで商工会を交えて話し合いをするということにし、8月24日に商工会の会長さんを迎えみんなで話し合いをしております。利用希望者は6名であること、利用希望者の要望にどこまで応えてもらえるのかなど、こちらの希望をまず話しました。

その中で事業開始時の問題点が何件かでてまいりました。

・配達エリアをどうするのか、・取扱い商品をどこまでにするのか、・訪問回数はどうするのか、・値段をどうするのか、・注文の取次場所、それをだれがどこで行な

うのか、などのいろんな問題がでてまいりました。

商工会の会長さんからは、商工会の会員の方々に持ち帰って、その人たちがどこまで協力していただけるのか、実際協力してもらえるのかどうか、返事をしていただくことにしましたが、9月7日には協力をしていただけるという返答をいただいたので、商工会の方々と移動販売業者の方々と話し合いをすることにしました。

仙南地区に移動販売業者が何件入っているか調べましたら、8件か9件入ったんですが、仙南地区にある移動販売業者にお願いすることにしました。

アンケートで6名の方が利用したいということでしたが、その方が本当に利用するかということをもう一度確認し利用方法も確認することにしました。

その結果、利用したいという方が最終的には4名になりました。

いまも4名利用しておりますが、最近近隣の方も便乗して「私も買いたい。いつ来るの?」というところで利用が始まっている場所もあります。

最後に、「福祉でまちづくり」ということをテーマに始まってきたわけですがけれども、各班別活動が、いままたお互いが必要としている活動が連携しながらまた一つにまとまろうとしているということを感じます。

この活動を通して仙南地区の人たちの、元気で活気のあるまちづくりの一役を担えるように、これからも協力していきたいというふうに思っております。

美郷町清水の里ふれあい運営委員会委員長 加藤勇孝 氏

トータルケアモデル地域の指定を受けまして昨年6月に、様々な階層分野から選出された多種彩々なる30名のメンバーによって清水の里ふれあい委員会が立ち上がりました。

地域における諸問題についてですが、専門職アンケートから見る地域の課題、並びに座談会・アンケート調査によってだされました問題・課題が200もあるんです。

そういう中から精査したうえで、特に早急にやらなければいけないものとして3つを選定いたしました。それが除排雪サービス事業と空き店舗活用事業、そして世代間交流という事業でございます。

1つ目の除雪の問題ですが、除雪問題を地域の問題として考えて、町内会の除草作業に参加するような態勢を除雪の面でもできないのか。また福祉教育面からも、子どもたちが除雪ボランティアをするのは大変良いことであるという点についても今後考えていきたいという意見が出されたようです。

次に空き店舗活用事業です。

まず地域のコミュニティ・センターとは違った使い方をしたい、そういう観点から、では、どこに、どういう場所にしたいのかというような話し合いがされました。

それから子どもから大人、お年寄りまで集える場所。それから六郷の伝統文化を伝える場所と、いろいろと話が出されました。

それから、そこでどういうことをしていったらいいのかという部分では、例えばこの地域で有名なおやきの実演販売、又は自家製野菜、漬物を販売する。要するに地産地消にもつなげていってはどうかというような意見や、フリーマーケットの開催などです。

それから保育園、幼稚園、小学生、中学生、高校生も含めて、子どもたちの作品を時々展示したほうがいいのではという意見も出されました。また、地元の六郷高校の生徒やサンワーク六郷と連携をとりながら活動できればいいとも思っております。とにかくいろんな人を巻き込んだ、楽しい場にしたいということです。

この「まめだ屋」という名前の由来ですが、とにかく健康で実りある生活をすごしていただきたいという思いをこめて「まめだ屋」と命名したわけです。看板も豆色で「まめだ屋」と表面に掲げました。これは六郷高校の美術部の生徒さんが一生懸命頑張って製作してくれた看板です。

子どもを巻き込むということは大事なことです。子どもさんが興味のある催し物をやりますと、当然お父さん、お母さん、保護者がまいます。もしくはおじいちゃん、おばあちゃんも見えられます。子どもさん一人のその動きに家族が揃ってついてきます。子どもさんを上手く良い意味で利用することがこの美郷町で必要なことではないかと思っております。

私は、世代間交流の作業班に所属しています。

いま大人も含めまして子どもたちは権威主義とか利害関係で結ばれているように思われてなりません。それは不信感が底流に流れているからだと思います。

本来の暖かい人間関係は、信頼することによってはじめて相手の言動を素直な気持ちで受け入れることができると思います。

世代間交流によって生命を尊重して慈しむ心を育てていかなければ、その地域の将来はないと思います。そういう子どもさん方をしっかり守って、健全に育成し、子どもさん方に夢と希望を与えて、勇気と自信を持たせてやるのがそこに住む地域住民、私たち大人たちではないのかと思っております。そういう意味から世代間交流というのはきわめて大事な事業ではないかと思っております。

それで第1回目として夏休みにマジック教室を開きました。思ったよりも参加者が来ましてお年寄りから、小学生、幼稚園の子どもさんなど50名弱の方が見られました。

そして私が講師となってその教室を開いたんですが、本当にいい雰囲気です。終えることができました。

最後になりましたが、私たち清水の里委員会はまだ一步を踏み出しただけにすぎません。ねばり強く、けっして燃え尽き症候群にならないように、これが大事だと思います。やっぱり持続ですね。継続は力なりです。気負わず、自然体で。一方通行じゃなく双方向のふれあいをしていきたいと思っています。

そしてトータルケアの一番大事なポイントは、住民の意識改革だと思います。住民の意識改革、ここにスポットを当てた事業でなければいけないと私は思っています。

そういう意識改革をしていくために様々な事業を展開していく、一方通行ではなく双方向でいく。こういう考え方で、町民歌の一節にあります「美郷は幸せ開く町、喜び招く町、未来をつくる町」を目指して今後も頑張ってまいりたいと思います。

岩手県雫石町社会福祉協議会福祉活動専門員 柿木典子 氏

雫石町は旧田沢湖町に隣接した出湯と小岩井農場で有名な町です。盛岡まで車で約20分、人口は19,086人、老人人口は4,965人。一人暮らし老人・夫婦老人世帯等も毎年増加の一途を辿っています。高齢化率は26.01%、地区によっては36.7%になっている集落もあります。ボランティアの数は32団体、375人です。

社会福祉協議会ですが、日常の生活で、あるいは座談会の皆さんのお話の中で不便を感じてること、こうあればいいと思われることをそのまま事業に結びつけてきました。

様々な事業があるわけですが、まず子育て支援事業について説明させていただきます。

始まりですが、社会福祉協議会へ足を運んだ一人の母子家庭の母親の願いからでした。

仕事を続けたいけれども、子どもが長く病気をしてるためにこれ以上休んだら首になってしまう。何とかありませんかと、子どもさんを連れのお母さんが来たわけです。そういうお母さんの切実な一声が、子育て支援事業を立ち上げたきっかけです。早々に子育て養成講座を受講した方、あとは保育の経験のある方々に呼びかけて、翌日には「雫石町子育て支援ボランティアの会」を立ち上げました。現在は150世帯、213名の乳幼児が登録しています。

子育てボランティアは18名程登録しておりまして、年間828件の託児を受けています。

この会の組織と運営方法ですが、社協で子育て支援相談員を委嘱しています。

その組織の中には保育部会、託児部会、相談部会とあります。土曜日学校が休みなので土曜開放教室ということで、世代間交流も兼ねまして7歳から87歳ぐらいまでの方々が参加して囲碁教室を開催しているんですが、そのお手伝いをしてる

方々が相談部会ということになります。

あと社会福祉協議会がある福祉センターの中に「ちびっこルーム ポケット」という託児室を整備いたしました。

託児の料金ですが、子ども一人について1時間400円、兄弟で預ける場合にはプラス200円ということになります。

どんなときに子どもを預けるかといいますと、一番多いのが保育所に預けてるんだけども急に体調を崩して面倒をみってくれる人がいないという方です。元気なんだけども保育所のほうで、「あと少しはまだお家にいてください」というときに預かることも多くあります。

最近では親御さんのリフレッシュということで美容院であるとかコンサート・映画等での利用も数多くありまして、大変喜ばれています。

福祉センターでは、毎日子どもたちの笑い声が響いています。センター外でもボランティアのお宅であるとか利用者の自宅、あとは体調の悪い子どものためにと町内にある小児科医の2階を開放してもらい、病児保育も行なっております。

雫石町の子育て支援の特色ですが、24時間子どもをお預かりしますよということです。社協は8時にならないと開きませんし5時半くらいに閉めてしまうものですから、それ以外の時間帯については、ボランティアの会長さん宅で電話で受付しております。

雫石町は観光地ですからホテルマンの親御さんも多いんですけども、ボランティアのお宅でお泊まりということで子どもさんを預かって、次の日保育所まで送っていく、というところこまでやっているのが特徴かと思われれます。

つぎは雫石町の昼食サービス事業です。

配食事業ですが、20年程前から集合型の一人暮らし老人の昼食会を月1回開催していましたが、平成3年に参加者の一人が体調を崩し食事が作れないと言ってきました。娘さんは遠くにいるが雫石まで来て介護するほどの経済力もない。という方がありまして、この方をきっかけに配食をすることになりました。

当初は赤い羽根共同募金の配分金の50万円だけでした。何カ月続くか不安だったのですが、岩手県ではじめて社会福祉協議会が配食サービスを行なったということもあり、年度途中から県から補助金を受けることができました。その後は町の委託事業としていまも継続しております。

事業を開始した当初は介護保険が始まる前でしたので訪問時間をやりくりして



実践フォーラムの様子

ヘルパーが調理し、配食を担当してました。翌年には「昼食サービスボランティアの会」を結成して、全町に配食するようになりました。

いま現在、配食の登録者数が56名、1日の配食件数が37食です。月曜日から金曜日のお昼、週5回配食しています。対象者は70歳以上の老人世帯、あるいは日中独居になってしまうようなお年寄りの世帯で、1食4百円現金で徴収しています。

事業の効果ですが、介護予防や介護保険対象者のケアプランの中に昼食サービスが位置づけられるようになり、要援護者の生活を支援できるようになったということ、昼食サービスのボランティアが老人世帯を訪問することにより、日常生活に張りや安心を与えてくれるということ、体調を崩してるところに訪問して救急車を呼んだことも何度かあり安否確認の役割も担っています。

3番目の「おやすみ処ぺこっと」の運営についてです。

雫石では大型店舗の進出より軒並みシャッターが降りてしまった商店街の活性化事業として平成16年度から商工会青年部と社会福祉協議会が共同で「おやすみ処ぺこっと」を開設することになりました。

「おやすみ処ぺこっと」は社会福祉協議会、ボランティア連絡協議会、ふれあいのまちづくり委員が中心となって運営しています。

住民の方々から、だれもが立ち寄って楽しくおしゃべりをしたり休んだりできるところがほしいという要請が前々からあり、町の真ん中に気兼ねなく休めて、ちょっとした情報交換や体験ができる場を実現する運びとなったわけです。

運営の中身ですけれども、商店街の空き店舗を商工会青年部が家賃3万円と光熱費を支払ってくださっています。

運営の方法ですが、月曜日から金曜日まで、10時から4時まで開いており、朝夕の施錠については商工会が行なっています。日中空にしておく心配なので、ボランティアが午前・午後に分けて当番制で「ぺこっと」に出ています。

福祉の情報ボードを設置して様々な情報を提供したり、ちぎり絵とか絵画の作品展示にも使われています。バス利用客の休息場所になっており、寒い冬は特に利用者が増えています。

「ぺこっと」では、おじいさん、おばあさんが「お魚がほしい、長靴がほしい、エプロンがほしい」というときにボランティアに電話を掛けてもらい、「ぺこっと」に商店から届けてもらうことができまして、居ながらにして買物ができてそのままバスに乗って帰れるということもできます。

4番目は雫石町におけるふれあいサロンの取り組みについてです。

これは平成8年に町に1カ所できたわけですが、1カ所だけだと社協の職員による送迎が大変でした。平成11年度の座談会から各行政区に1つのサロンを設置し

ましょう、そして普段着でシルバーカーを押してでも行ける部落公民館でサロンを開きましようと呼びかけをしたところ、現在 20 ヲ所でサロンが開かれています。

参加する人たちは「何もかも面白い、また会うのが楽しみだ」といって帰って来ますが、先程美郷町社協の次長さんからお年寄りに居場所がないというお話がありました。秋田県も自殺者数が多いようですが、岩手県はそれに引き続いて多い県でありまして、雫石は昨年、その前の年と、岩手県でも 2 番、3 番というくらい自殺者数の多い所でもあります。

それも独居老人ではなく 2 世帯、3 世帯と家族がいるお年寄りの自殺が多い。どうしてなのかと思うのですが、私はいろんな集まりのとき、「家族の中で挨拶してますか」と聞くと、それこそおじいちゃん、おばあちゃんは、「今日、家の人とだれも話をしなかった」、「いつご飯食べていいのか、いつお風呂に入っているのか、さっぱり分からない」、「若い人ら買物に行くといったって、一言も声も掛けられないで、おら、何していいか分からない」というのです。

やはり、家族内での声かけが本当に必要なんじゃないかなと思います。

そういうわけでふれあいサロンは孤独感の解消に非常に役に立っていると思ひまして、できれば雫石の場合 74 の行政区すべてにサロンを設置したいということで毎年座談会で話をしてるところであります。

雫石のサロンの特徴として、長年サロンを開設しているとマンネリ化したり、今度何をやったらいいか思い悩むことも多いわけですが、そういうことを解消するために月 1 回ボランティアの定例会を社協で開いており、そのときに情報交換したり、サロンのスタッフの研修会ということでレクリエーションの取り入れ方など様々な講習会を開いています。

次にお出かけ援助サービス、いわゆる移送サービスです。

平成 7 年 4 月から雫石町では移送サービスを始めております。平成 12 年 4 月からは福祉車両の寄贈を受けまして車椅子の方でも移送サービスが可能になりました。

サービスの現状ですが、いま福祉車両が 3 台ありまして、町内の送迎については千円です。町外については 2 千円頂戴してまして、これらはすべて運転手さんにお支払いするという事になってます。

これは病院に限らず、買物や床屋だつたりと利用者に合わせて移送サービスを行っています。対象者は介護保険の認定者と身体障害者の手帳を持ってる方で、89 名が登録し利用件数が昨年は 934 件でした。

今後の課題ですが、昼食サービスもさることながらこの移送サービスも介護保険のケアプランの中に盛り込まれるようになりまして毎年増えてきてますが、福祉車両 3 台を維持していくのが財政的に困難になってきたという問題が出てきています。

次に雫石町ボランティア連絡協議会の協働事業ですが、一番大きな事業として「雫石町ボランティアまつり」の開催があげられます。今年で 13 回目を迎え、毎年参加者も増えまして今年も 2 千人ほどの参加者がありました。

このお祭りの特徴は、中学校、高校生が実行委員会の段階から企画・運営しているということです。今年はボランティアの方々374 名が参加してボランティアまつりを盛り上げてくれました。

その他の住民参加活動ということで、1 つ目に雫石町スノーバスターズ事業を紹介します。

はじめは、雪かきが大変なために冬場家にとじこもりがちになるお年寄りの世帯に出向き雪かきをするボランティアをしようという呼びかけに対して、ボランティアが登録しました。平成 5 年 12 月に会が発足し、スノーバスターズの定期的な活動は 1 月から 2 月の毎週土曜日に行なわれています。

事務局が置いてある福祉センターの玄関に午後 1 時に集合し、その日の活動内容を確認し、それから地区ごとの班に別れてボランティアの車に乗ります。

メンバーは中・高生、企業ボランティアの構成です。子どもたちは毎回多くの参加があるのですが、運転してくださるようなボランティアが高齢化し人数も少なくなってきたという悩みがあります。18 年度は延べ 268 世帯に対してボランティア 368 名が参加しました。

雫石の特徴としては、雪が降ったときにはいつでも雪かきしますよということで 1 時間千円頂戴しております。

今後の活動ですが、スノーバスターズの会員が増えないという問題があり、団塊の世代の方々に多く参加していただきたいと考えています。

2 つ目にめぐり逢い事業、集団のお見合い事業についてです。

座談会で地区に子どもがいない、40 過ぎても嫁の来てがない、独身の男女の出会いがない等多くの意見が毎年出されてきました。

これらの意見をもとに平成 8 年度に「第 1 回めぐり逢い事業実行委員会」を開催しました。実行委員にはできるだけ若い人たちの意見を取り入れたいという思いから商工会青年部、農協青年部、役場青年部等に依頼して、開催当日まで何度も何度も意見を交わし合って開催にいたっております。

19 年度で第 10 回になりましたが、結婚にいたったカップルも多くおります。

最後ですが、現在、社会福祉協議会ではボランティア相談員ということで 3 名程委嘱しています。ほぼ毎日のように社協に来て「ぺこっと」の当番表の作成や毎月発行してる「ボランティア雫石」作り、あとは社協の事業にもお手伝いをいただいております。

本当に雫石町の場合にはボランティア無くして社協の事業は成り立たないというところであります。

また、先程美郷町社協の次長さんが、「これからの地域福祉を行なうのは社協しかないんだ」というお話を聞きまして、非常に大きな力と勇気が湧いてきましたし、今日ここに参加させてもらって良かったなと感じました。

平成 19 年 10 月 23 日（火） 午後 3:50～5:00

シンポジウム 「美郷町における保健・福祉の推進」

美郷町福祉保健課長：辻 一志氏

私のほうから自殺予防対策についてお話しさせていただきますけど、まず自殺の現状というところからお話しさせていただきます。

いま全国で自殺で亡くなる方は 3 万人います。先程小野先生からもありましたとおり秋田県は平成 7 年から、人口 10 万人当たりの自殺率では全国一という、あまり嬉しくない記録を続けてるのはご存知のとおりです。

美郷町もけっして少ないほうではありません。18 年中に亡くなった方は 6 人ですが、それ以前は 10 人以上の方が毎年、多い年では 20 人近くの方が自殺で亡くなっています。この率は県の率を超えている状況です。

実は 17 年 7 月に「心の健康づくりのアンケート」を町内の一部の地域で取りましたけれども、その中でも“あなたの知ってる人で自殺した人がいるか”という質問を項目に加えてみましたが、実は 53%の方が身近で自殺で亡くなった方がいるという結果が出ました。

かなり厳しい状況にあるし、自殺の原因はいろいろあるわけですが、18 年の秋田県の場合に自殺の原因の整理のされ方をみますと病気が 32.7%、経済生活苦の方が 30.4%という報告があります。

ただ、昨年自殺対策基本法という議員立法でできた法律がありますけれども、その中の条文にも自殺は個人的な問題としてのみとらえるべきではなくて、背景には様々な社会的要因があるんだという指摘があります。

実際に平成 10 年という年は、はじめて自殺で亡くなった方が 3 万人を超えた年ですが、この年は秋田県も 300 人台から 400 人台になりました。美郷町の数字を見ても、この年を境に 10 人台で亡くなる方が継続してきています。

美郷町としてはストレスとの関係に注目してます。ストレスによって追い詰められた状態が続くとうつ状態になったり、あるいは孤立化しやすくなったりします。

この状態がずっと続くことによってうつ病を発症する。うつ病という病気によって、普通ならば死を選ばないはずなのに、選んでしまう。正常な判断ができなくなってしまふ。そういったケースが多いという報告があります。

先程 17 年のアンケートについてお話ししましたが、そのアンケートでも多くの人が、美郷町でも多くの人がストレスを感じて生活してるということがよく分かりました。

もう一つは年齢の高い方がうつ病に対する知識に少し欠けてるのかなというアンケート調査結果も分かりました。

そういった結果を受けて美郷町としては 2 つの目標を立ててます。1 つはストレスの対処方法を学んで心の健康を保つこと。もう 1 つは自殺やうつに対する正しい知識の普及と、それから精神の病気に対する偏見を無くすこと。この 2 つの目標を立てながら現在事業を実施しているところです。

自殺というのは亡くなった個人だけの問題じゃなくて、遺族の方、友達関係の方など多くの方が心に深い傷を負うわけですが、ただ、防げないわけではない。特に経済的な問題にしる、病気、例えばうつ病による自殺にしる、適切に対応できれば絶対防げるといふ思いで私たちは事業に取り組んでます。

具体的な取り組みとしては先程申し上げましたとおりアンケートの結果によってうつ尺度というのを測りました。それによって尺度の高い人たちが選ばれ、こういう方々を秋田大学の先生と協力しながら対象にカウンセリングを継続して実施しております。

それからストレスについて学ぶことを目的に連携アップセミナーというのを住民の方を対象にして実施しております。

これはストレスの受け止め方とか解消の方法を学ぶんですが、一昨年からはじめ、今年は 8 月に臨床心理師の先生をお招きし、「より良く生きるための秘訣」というテーマでストレスについて学びました。11 月までに 4 回やります。

それから今年始めた取り組み事業ですけども「メンタルヘルス・サポーター養成講座」というのを開催します。

あと電話でも保健師が相談にのっておりますし、広報でもうつ病をよく理解できるようにと特集を組んだりしながら啓蒙活動に努めているところです。

昨年は自殺者が 10 人を下回ったんですが今年はまた増加傾向にあるというような話も聞こえておまして、こういう自殺予防対策というのは息の長い取り組みが必要になってくる、短期的な取り組みで成果を出すようなものじゃないんだらうなと思っております。

息長く継続的にねばり強くやっていくということで、自殺による悲劇を繰り返さ

ないためにも是非われわれの事業なり社協さんの事業なりを組合せながら、住民の皆さんとともに地域で支え合えるような態勢をつくっていきたいなと思っているところです。

美郷町仙南診療所院長 照井 哲氏

本日の講演内容としては美郷町の高齢化とわが国の医療動向について、地域の医療・保健・福祉システムの構築について、それからみんなで支える地域の健康生活、この3点についてお話しいたします。

美郷町の高齢化率と介護保険の現状ですが、いま美郷町は年間300人から500人ぐらいずつ人が減ってます。

前期高齢者と後期高齢者を併せて29%という状況です。

平成18年4月現在の介護保険認定者の状況ですが、14年4月末に比べて介護度の高い人が増えてます。介護3、4、5の方々が非常に増えててこれが問題となっています。

美郷町には高齢化とともに一人暮らしの方がたくさんいらっしゃいます。一人暮らしの医療機関受診者の疾病内容というアンケート結果ですが、トップバッターは高血圧ですね。それから2番目としては眼の問題、白内障の問題がでてきてますね。多分これは白内障、緑内障系統の問題だと思います。それから腰痛、肩こり。

さて、昨今医療費問題が非常に言われてます。医療費の保険を上げるかどうかというので、このままいきますと2006年に28兆、2015年には40兆、2025年には現行制度でいけば56兆という医療費が必要となってきます。

もう医療費の値上がりは来年の4月からと目先に迫ってます。

医療費の問題を今後どうするか、アメリカみたいに自己責任で自分で保険を掛けて自分でやりなさいという形か、ヨーロッパみたいに社会保障である程度やっていくか、いまだどっちに振れるかというのが非常に問題になってます。

それから療養病床の減少ということも非常に大きな問題になってます。いま療養病床25万床のところ15万床まで10万床くらい減らす。10万床減らすということは、10万床の人がどこかに行かないといけませんから、その人たちをどうするか。

でも、特別養護老人ホームや、介護老人ホーム、小規模型のグループホームな



シンポジウムの様子

どもいっぱいですよ。この人たちが病院から出されたときに、誰がどうやって診ていくのかが問題なんです。これをどこかで支えていかないといけない。

これからは実際にトータルケアのほうなんですけど、われわれ医療の場合何かするといっても患者さんが来てくれないと何もできません。実際に地域で見てもらわないと何ともなりません。で、何をするか？

地域背景や社会特性、住民ニーズや実態把握などを通して「おもう(構想する)」、それで何とかつくっていく(構築する) それで使ってみて(活用する)というサイクルで回していくという形です。

先程の「よってって」や「まめだ屋」などでも地域住民がどういうふうに生活してるかというのを確認できると思います。あくまでも地域の包括医療を考える場合に大事なものは、住民がどう思ってるかという住民のニーズなわけです。

福祉、介護が入って、保健も入って、医療も入って、住民を支えるわけなんですけど、このごろ家族、近隣、町内、学区のサポート力が非常に落ちてるといことです。

子どももいなくなって、若い人は働きに行って、家では高齢者が日中1人、2人でいるという形になりますので、このへんのサポート力をどうするかというのがこの地域でも大きな問題だと思います。

今日は社会福祉協議会の方がいて、この中にもケアマネジャーなどたくさんいらっしゃると思います。介護保険事業を考える場合、ケア会議というのは非常に重要になります。私達医療の場合は情報を得ないといけません、毎日往診したり電話を掛けて「どうしてるの?」とは聞けませんので、周りのいろんな人たちからの情報を得ないと私たちは動けないのです。

それに対していままでは情報のネットワークが非常に少なかったんです。今度トータルケアの委員会ができましたので、いろんなところからいろんな情報が得られるので、これからはもう少しわれわれも出て行ける、医療側としてサービスができるんじゃないかと思います。

社会福祉協議会の中では地域包括センターを受託しているところがあると思いますので、ここがいろんな機関と連携をしていけば、医療・福祉の連携、それから保健の連携というのも非常に上手くいくんじゃないかと思います。

それから障害者福祉の場合、障害者自立支援法ができましたので、障害者もいろいろ対策を考えていかなきゃいけない。障害者の社会復帰をどうするかということでトータルケア委員会でもフローチャートを作ってみました。

この地域社会の統合システムを考える場合に非常に大事なものは、ここの生活者の生活の場を配慮したサービス提供をしないといけない。私たちは注射を打ったり、介護ベッドを置いたりとか物に走ってサービスをしやすいんですが、本来そこに住

民のニーズがあるのかどうかということですね。

これは美郷町のアンケート結果ですが、やはり見守りをすると孤独感の解消やとじこもり防止につながる、それから高齢者に限らず見守ってほしい、自分も協力していきたい、老後も安心して暮らせそう、こういう結果が出てます。

トータルケアを考える場合にいかに人を引っ張ってきて参加してそれを継続させるかというのが大事だと思います。建物を造ってきれいにして、そのあとどう継続するか。やはりみんな楽しんで、技術や知識を高めていけば、手間は掛かりますけどもきっとやりがいとか喜びはでてくるはずなんです。

私たち医療の場合を考えた場合、先程辻課長もお話ししましたが薬で治すのはできるんですが、なかなか心の栄養というのは難しいんです。それで、先程の高齢者のうつの問題、うつからのとじこもりの問題、そういうのを解決するのは非常に難しい。是非トータルケア委員会などがサポートしてもらえれば、もっと活躍する場ができるんじゃないかと思います。

最後ですが、「つまらない」「調子悪い」とぶつぶつ言っても何も変化は起きません。私のところにもぶつぶつ毎日来て言うばっちゃんもいます。「面白いの?」、「何も面白くない」と言うんですね。「何かしたら」、「したくない」と言うんですね。でも、毎日楽しいことをすごすために積極的に社会活動に参加しましょう。

社会活動をすることはきっと心と体に栄養を貰えると思います。是非皆さんも社会活動を試してみてください。

美郷町社会福祉協議会事務局長 高橋 幸悦氏

17年度に指定を受けいま3年目ですが、ある程度の成果というのと、トータルケアに取り組むことによって地域の問題を地域で考えるきっかけづくりができたことだと思います。

また、様々な活動をとおして地域住民の皆さんの声を聞きながら、その声を事業・活動に取り入れて展開していくというプロセスが作り上げられてきているということも成果の一つだと思います。

その結果として「よってって」や「まめだ屋」だけではなく、他にもいろんな活動ができてきている。社協としては地域福祉活動計画もトータルケアを進める中で検討ができたと思っています。

そういう取り組みを進めてきた中で、これまで社協はややもすれば「年とった人たちのことなんだべ・・・」、「福祉だべ・・・」というように、ごく限られた一部の人のための社協という見られ方があったわけですが、そうではなくて、やはり社協というのはわれわれの生活そのものすべてに関わるというふうに見ても

らえるようになったということです。

逆に言えば、これまで何をやってるのか分からない、会費を納めてはきたんだけど、何やってるか分からなかった社協の活動が、これまで以上に地域の皆さんに見えてきた面もあるし、様々な形で目にふれる活動ができてきたということも少し思っています。

トータルケアサポート運営委員会は、それぞれの地域のふれあい運営委員会の皆さんも併せますと120名程おりますし、最初に大阪次長からお話があったようにその委員の方々というのはやはり社協の活動のよき理解者ですし、逆に言いますと応援団でもあるのです。

まさに社協自体が背広を脱いでもっと住民の皆さんに近づいたというような感じもします。そういった中で住民とのつながりが持てたし、それが糸口となっているような活動に結びついてきているという思いがします。

では何も問題ないのかというと、けっしてそうではなく、まだ走り出したばかりですのでいろんな課題等も感じられます。確かに地域で頑張ってくださいの方々もいらっしゃるんですが、美郷町全体を見たときに、どこの地域でも、どこの地区でもそういった姿が見られるかということ、まだだなということです。

地域福祉座談会等を開きながら自分たちでできることは自分たちで、地域でできることは地域でしてくださいとお願いしてますし、照井先生のお話にあったように、むかしの地域のつながりみたいなものを復活させたいという思いですが、まだほんとの意味ではそこまでいってない。逆に言うと、職員が主導しているという面もありますし、また、職員の仕事があまりにも多岐に渡って忙しすぎるというような面も見えてきております。

そういう部分については福祉活動計画の見直しを含めて、これまでの事業とトータルケアの中ですすめていく事業の位置づけをやっていかなければならないと思っています。

地域の皆さん一人ひとりが様々な地域の問題を解決するために行動を起こしてもらおうという場合は、地域で誰かが陰ながらでも応援するというのも必要なのではないかと。そのためには、われわれ職員も地域の住民の一人ですので、地域の様々な活動に率先して参加していくことが必要なんだということを逆に教えられたという感じです。

そういった中でこれから社協が地域に求められる活動を展開していくには、一つには職員の資質を高める、あえて言わせていただければコーディネート力を高めていきたい。

職員それぞれいろんな問題・課題について相談を受けますが、その話をただ本人

が訴える部分だけを聞いて判断しようとするれば大きな間違いをする場合があります。やはり訴えている相談の裏側を見れるといいですか、様々な角度から問題を考える、そしてそれを続けることによって逆に前に経験したことをいまの事例にたとえて考えるというような形で、問題の早期発見にもつながるし、場合によっては予防的な部分にもつながるのではと思っています。

モデル地区としてトータルケアに取り組んできたわけですが、モデルが終了したあと美郷町はどうするのか、ということが皆さんにも興味のあるところだと思いますが、けっしてモデル指定が終了したからトータルケアが満足にいったものだとは思っていませんし、これが本当に地域を挙げて定着していくためには、10年、15年と長い年月が必要だろうと思います。トータルケアと一口に言いますが、やはり地域の意識改革だと思いますので10年、15年にかかるという認識でありますし、モデル終了後もまた別な形で委員会等を立ち上げながら地域の問題を考えて解決していく方策・方法を、地域住民の皆さんから考えてもらいながらすすめていきたいと思っています。

コーディネーター：田園調布学園大学教授 小野 敏明氏

高橋局長から、いままでの成果を踏まえてこれからどうしていくのかというお話しでしたが、特に私のほうからも強調しておきたいのは、住民の力をそのまま生かし、美郷町社協の地域福祉活動計画の中では3地区のサポート運営委員会を改組して、まさにその住民が住民課題解決を図っていく、基本は企画ということですが、住民が積極的に動くところをきちんとつくっていきこうとしています。

モデルは今年度で終了ですけれども、そこを継続させていくということも一応社協の活動計画に載せてあります。

シンポジストの皆さま方にもう一言ずつほしいのですが、時間もありませんので、私のほうでまとめさせていただきたいと思っています。

基本的には町全体のことを考えたときに、いわゆる医療・保健・福祉が本当にどうきちんとつながり合うかというのが最も大事なことです。なかなかしっかりできないというのが大きな課題となっています。

さらに言えば自殺問題というのは、私はやはり福祉サイドの積極的な取り組みが必要なんじゃないかなと思っています。

いわゆる医療・保健・福祉のネットワークにおける総合相談体制というところ、こ



小野敏明氏によるまとめ

の相談のネットワークというのが非常に大切だと思っています。

照井先生のスライドを拝借しますが、これは第2階層の美郷町全体のサポート委員会で相談のネットワーク体制をつくろうと話合われていて、その委員会でつくられたもので、これも美郷町社会福祉協議会の地域福祉計画に載っています。

この中に先程辻課長さんが話されたメンタルヘルス・サポーター養成講座を終わった人、そこからさらに社協の傾聴ボランティアの講座を終わった人たちが一緒になって、この仕組みの中にどうきちんと入るか。そして、その人たちの活動場所が実は「よってって」や「まめだ屋」で相談を受けていく、話を聴くという体制がすごく大事だと思います。

私のところに少し前の新聞がありますが、八峰町の旧八森町ですが、ここに「シーガル」というサロンがあるんですね。そのサロンは「ひだまりの会」というボランティア組織が運営しています。この人たちは町が開いた自殺予防ボランティア養成講座で学んで、そうした人たちの話を聞いていくという活動をしているんですね。

そういう意味ではまさに「よってって」や「まめだ屋」を拠点にして、そうした話を聞いていくことで、少しでも自殺予防につながっていけばいいと思います。

もう一つ自殺の問題を考えると非常に大きな問題がありまして、先程辻課長さんがちょっとお話ししたところで平成9年から平成10年という部分で自殺者がいっきに8千人ほど増えてるんですね。

ところが、これは警察庁が取ってる統計ですが、昭和58年から実は昨年までの長い統計を全部見てみると、日本の総自殺者数に対して60歳以上の人占める割合は3割というの変わらないんです。

平成9年から平成10年、ここはいろんな先程辻課長さんが話された青少年の自殺とか中高年の人たちのリストラとか様々な問題があって自殺者が増えるんですが、増えたとしても高齢者が自殺する割合の3割というのは変わってません。これ非常に大きな問題なんですね。しかも平成18年の自殺者数の32,000人のうちの男女の内訳を見ると、男性が7割、女性は3割です。

先程サロンの様子がありましたがどうして男性が少ないんですか？

美郷では何とか男性を引っ張りだそうとして、男性参加の収益事業という活動を展開してるんですがもう一歩です。男性のほうが自殺率が高いので男性を引っ張りだす要素を考えないといけません。私はやはりモノ作りとか仕事作りだと思います。勤労意欲の高い日本人ですから、そうしたものを手段にしながら男性に役割を与える、やることを持ってもらうということは非常に大事なんですね。

家族同居の高齢者の自殺が多いと、先程栗石の柿木さんが言ってました。これははっきりしてます。20年前に日本全国一の自殺率を示したのが新潟県のある町です。

人口5千人の町で10年間で193人自殺してるんですが、すべて家族同居型の高齢者です。一人暮らし老人は1人も自殺していないんです。なぜか？一人暮らしの人が具合が悪くても、少々風邪をひいても、自分のことは自分でやらなければいけないからです。

それから家庭内の孤立というのもありました。照井先生が最後のスライドで見たように、やっぱり社会参加、とにかく中年層の人たち、いま子育てしている世代の人たちも社会参加する。それから住民交流拠点「よってって」「まめだ屋」のようなところでいろんな人が交流する。特に高齢者と子どもたちが会う。そして男性も土曜・日曜はいろんな社会活動に参加する。そういうことによっておそらく私は家族の中の会話が増えるんじゃないかと思います。

その意味では、やっぱりやることがある、役割がある、このことを特に男性高齢者にどうしてもらうのか。これが美郷でも課題だと思いますし、こういうことを皆さん方の地域の中でも是非考えていただきたい。

そして最後に美郷のこれからの課題は、福祉コミュニティをどうつくるのかということです。その1つは住民の福祉活動が豊かになることですが、美郷は豊かになってきました。

もう1つはいわゆる自治体が地域福祉推進の基本的な町の福祉システムをつくること。これは美郷町も地域福祉計画を作りました。

そこでもう一步進んで大事なものは、住民の活動と、さらに制度上のサービスを担う専門職の人がきちんと結びついて、連携して、いわゆるソーシャル・サポート・ネットワークという地域で支える仕組みをどうつくるか。ここがやはりこれからの美郷町の目標だし、まさに皆さん方の地域の中でもそこをどうつくるのかだと思います。

住民の活動と、公的なサービスを担ってる機関、そこがどうしっかり協働できるか。それができてまさにソーシャル・サポート・ネットワークを形成するということなんですね。網の目のように地域で支える仕組みということになります。

このことこそがこの県社協が推進してきているこの地域福祉トータルケア推進事業の目標なんだと私は理解しています。是非、そうした地域づくりを皆さんのところですすめていただければと思います。

平成 19 年 10 月 24 日（水） 午前 9:30～11:00

体験プログラム 1 「美郷町地域福祉活動計画策定のプロセスを学ぶ」

体験プログラム 1 には、県内の市町村社協職員、地区社協役員など 29 名の参加者が集まった。

美郷町社協では、まず地域福祉活動計画策定にあたって地域福祉課題の把握に取り組んだ。

地域課題の把握は、専門職調査として実施、町内の福祉関係者（行政、在宅福祉サービス関係者、保育園、民生児童委員、社協職員）に対して「最近地域で気になる相談や増えている相談はあるか」「公的サービスで対応できずに困っているケース」などの項目で調査を行ったほか、一人ぐらし高齢者の生活状況を把握するために、「訪問者はいるか」「普段出かける場所があるか」「楽しみにしていることは何か」などの項目で調査を行ったほか、中学生に対しても一人暮らし高齢者に対するイメージや訪問した感想などについてアンケート調査も行った。

さらに、地域座談会でも座談会参加者に対してアンケートを行い「最近気になる地域の課題は何か」「地域の課題に対してあなたができることは」「地域の課題に対して地域でできることは」という項目で聞き取りを行い、最終的にこれらの調査結果を基に地域課題を約 50 項目リストアップした。

次に地域福祉活動計画における事業内容の検討であるが、社協が行っている現状の 69 事業を検討するために社協職員で「小地域福祉班」「在宅福祉班」「福祉教育・ボランティア班」の 3 つのプロジェクト班を作り、事業の検討を行った。

各プロジェクトで検討する際には、「業務分析シート」というシートに事業の現状や課題、今後の方向性を書き込み事業の必要性などについての検討を行った。

各プロジェクト班で検討された内容は、主査、次長、局長による中心プロジェクトでさらに検討され、事務局案として地域福祉活動計画策定委員会に提出され検討を行った。

渋谷さんからは、活動計画策定のプロセスを通して、「合併後各センターで別々に進められていた事業もあったが、このプロジェクトを通して同じ方向を向いて検討できた」「業務分析シートでは事業がフローチャートで一目で分かり共有化に効果的だった」という話があった。

また、活動計画策定を通して社協の組織目標をどうするか、社協事業のマンネリ化をどう解消するか、という視点でも検討を行い、結果として 6 つの事業を廃止したということだった。

従来からの事業にトータルケア事業が加わったことについては、「住民にとってより見える社協になった」ということで活動計画にも事業の継続を明記している。

参加者からは、「具体的に廃止した事業は何か」「歳末助け合いの方向性は」などの質問があり、高橋事務局長から「廃止の方向で検討するという事業もあるが、社協財政や行政との協議が必要なものもあり計画通り廃止となるか不透明な事業もある」「歳末助け合いは、民生委員に生活保護世帯を除いた生活が大変な方をピックアップしてもらい、それに社協の判断も加え対象世帯を選定しているが、民生委員の目線をそろえるのが課題となっている」という回答があった。

最後に、田園調布学園大学の小野敏明先生から、「地域福祉活動計画策定の意義と視点・方法」というテーマで講義をしていただき、「行政の地域福祉計画と社協の地域福祉活動計画はきちんと連動すべきものである」「地域福祉活動計画は公的サービスでは解決できない住民ニーズの把握や地域課題の把握を行い、それらを解決する住民活動を創設するものであり、また、住民活動と住民活動が協働するネットワークを形成することが不可欠である」「住民参加の手法として、地域の問題を地域の人に考えてもらうことが大切」などのお話があった。

(秋田県社協 門脇 琢也)

体験プログラム2「匠と一緒にラベンダーポプリを作ろう」

体験プログラム2は、美郷町社協が所在する千畑福祉センターで行われ、県内の市町村社協職員や福祉員、地元住民など、計20名が参加した。

ここでは、美郷町社協がトータルケアの一環で進めている「美郷の匠事業」をセミナー参加者に体験していただくとするもので、今回は千畑地区の象徴であるラベンダーを使ったポプリづくりなどを通し、参加者に美郷町の自然を感じていただくとともに、町民や参加者相互の交流を深めていただいたところである。

この事業は、地域住民が持つ能力を地元のために活かしてもらおうと、その道に精通する住民を“匠”と称して講師に招き、その知識や技術を地域住民に伝えていくと同時に、トータルケア実践の成果として開設した住民交流拠点“よってって”やコミュニティセンターなど、地域の身近な拠点を活用しながら生きがい・健康づくりや、閉じこもりを予防など、元気な地域づくりを推進していこうとするものであり、現在は主に仙南地区を中心に手芸や健康体操、カラオケなどを行っている。



このたび、その匠として指導を仰いだのは千畑地区にお住まいの高橋レイ子さんとその娘さんで、お二人からは乾燥させたラベンダーを色とりどりの小さな布製の袋に詰めて作成する“ラベンダーポプリ(匂い袋)”と、およそ15センチ四方の木枠の中に各自が加工したラベンダーをディスプレイする“ラ

ベンダーフレーム”の作り方を教わっており、参加者はそれぞれポプリの袋の色とそれを結ぶ紐の色とのコーディネートや、フレームのデザインとそれに入れるラベンダーの飾り方などに工夫を凝らした。その甲斐あって、完成品は各参加者の個性が詰まった仕上がりとなり、自分が作った作品を満足げに眺める参加者を多く目にする事ができた。

約90分間のプログラムではあったものの、和やかな雰囲気の中で楽しく進められたため終了時間が非常に早く感じられたとともに、作業を進めるにつれ、部屋いっぱいラベンダーのほのかな香りがやさしく広まり、参加者は一様に心休まる癒しのひと時を堪能できた。

このたびの体験が、参加者それぞれの地域での“安心して暮らし続けることができる地域づくり”に向けたヒントが生まれるきっかけとなることを期待したい。

(秋田県社協 安田 大樹)



上段：ポプリ
下段：ラベンダーフレーム

体験プログラム3「清水の里街かどサロンと清水めぐり」

“みんながいつまでも「まめ(健康)で実りある生活」を過ごしていただきたい”という思いを込め名づけられた「まめだ屋」。美郷町では、仙南地区の「よってって」に次ぐ空き店舗活用事業(福祉でまちづくり事業)で、本年9月26日にオープンしたばかりである。商店街の中心にあり、住民の目にもとまりやすく、六郷高校の美術部力作の看板も開設に花を添えている。

いつでも、誰でも気軽に立ち寄り交流を深める憩いの場を目指し、待ち合わせ場所、憩いの場、集いの場、健康づくりの場、買い物や通院帰り休憩の場、サークル・趣味活動の場などに利用でき無料開放している。

また、サンワーク六郷の利用者による喫茶コーナー(清水をつかったコーヒー・お茶)、地鶏のたまご販売、パンの販売などもある。

オープン後一ヶ月を経過したばかりであるが、オープンイベントとして健康講座・マジックショー・映画鑑賞会・お菓子作り教室が開催された。訪問時は、オープン月間の特別展示として、昭和36年に開催された秋田国体の写真が展示されていた。

有名な清水を沸かし、いれたてのコーヒーと「はとむぎせんべい」をいただきながら、板谷次長から、事業の年間スケジュール、開設経費・維持費などを聞くことができた。

その後は、観光ボランティアの案内による清水をめぐりながら六郷地区の歴史を

学んだ。町で行き会う人は「こんにちは」、「よくいらっしやいました」など笑顔であいさつをかわしてくれた。

まちの歴史・伝統、住民のあたたかさ、自治会の結束力など、地域のもつ良さ・強みを基盤にしつつ、清水の里ふれあい委員会による様々な事業が新たな住民意識を芽生えさせ、住民参画・参加のトータルケアが展開されていくものと期待される。

「まめだ屋」は、駐車場も広く商店街の中心部にもあり訪問しやすいうえ、清水巡り、地元ならではの土産品など楽しんでいただけたらと思う、是非訪問し体感していただきたい。

(秋田県社協 佐藤 哲)

体験プログラム4「雁の里交流拠点ではと麦ドンと草履作り」

この体験プログラムでは、まず美郷町社会福祉協議会担当の木村さんから住民交流拠点「よってって」に関する説明があり、建物内の見学が行われた。

美郷町仙南地区後三年駅前に設置された地域交流拠点「よってって」は、高齢者、子ども、障害者、各種サークルなど地域の方々が気軽に集える拠点として平成18年9月にオープンし、町内の施設のバザー、将棋や囲碁などの教室、子育て相談、読み



草履作りの様子

聞かせ、昔遊びなど、地域に根ざしたさまざまな催しを実施されている。以前、後三年地区には、郵便局、保育所、金融機関（JA）などがあったようだが、いずれも移転や閉店などにより姿を消し地域の活気が失われつつあっただけに、住民が交流できる拠点「よってって」の存在が地域にとって大切なものになっている状況が説明された。

その後、地元ボランティアの出雲房子さんの指導により、使い古しの衣服やタオル生地を利用した布草履づくりに挑戦した。この布草履づくりは、その作業の過程で裸足で作業を行うことによりマッサージの効果があり健康維持につながることに、また、完成した草履を室内で履くことで埃などが付着し家がきれいになる効果もあるという。参加者の中には、慣れない作業になかなかうまく進まない人もいましたが、皆さん楽しみながら草履づくりを体験している様子だった。

また、外に設置されたテントでは「はと麦ドン」づくりの実演が行われ、予想以上の大きな音に戸惑いながらも、手作りのドン菓子の出来ばえに感心していた。

体験プログラムを通して住民交流拠点「よってって」が、住民に活用されることで地域に浸透している様子がうかがえ、特にプログラムに参加した地元の人たちの楽しそうな表情が印象的だった。参加者が今回のプログラムの経験を活かし、それぞれの地域でこのような拠点づくりが進められることが期待される。

（秋田県社協 笈川卓也）